書　評・紹　介

森岡清美・青井和夫編
『現代日本人のライフコース』

日本学術振興会，1987年，viii＋489pp.

本書は，ＦＬＣ（Family and Life Course）研究会（代表：森岡清美教授）が静岡市の人口集中地区に居住する有配偶中年男子（45〜64歳）を対象にして実施した調査研究の成果をとりまとめたものである．

その構成をみると，序章ライフコース接近の意義，第Ⅰ章研究の目的と方法，第Ⅱ章中年男子のライフコースと危機的移行，第Ⅲ章世代間関係の経歴，第Ⅳ章ライフコースの日米比較，終章現代日本人のライフコース，付録１ライフヒストリーの要約―代表的事例集―付録２調査票とからなっている．

序章をみると，「ライフコースは個人に注目しその時間的展開，つまり発達過程を研究するのであるが，発達心理学者のように心理的発達段階を手掛かりとするのではなく，社会的に規定された発達過程，いいかえると何歳ぐらいでどのような出来事を経験し，どのような役割の移行を経験するか」（p.2），つまり「『年齢別に分化した役割と出来事（events）』を手掛かりとして考察を進める」（p.2）ものであるが，この方法は，社会変動と個人のライフコースとのつながりを改めて意識せざるを得なくなった時代情況（例：女性解放運動）とライフサイクル研究の限界を乗り越えようとする研究者の苦渋に満ちた思索のプロセスとを背景にして成立したとされている．そのライフサイクル研究の限界とは，①平均的標準的家族から外れた家族は対象外とされたこと，②家族の集団的統一性を自明のこととし，今日みられる家族の集団的統一性の希薄さへの認識が欠如していたこと，③同一時点の資料を時間の前後関係に配列していたため，個々人に与える歴史的刻印を的確に把握しえなかった等々の点である．このようなライフサイクル研究のもつ限界が，ライフコース接近を登場させる契機となったとのことである．したがって，このアプローチは，「①個人を中心に据えること，②人間の発達に注目していること，③個人をコーホートでまとめて観察していること，④歴史的事件のインパクトを重視すること」（p.10）を特徴とすることになる．

このような研究史をふまえて，ＦＬＣ研究会は，静岡市を調査対象地に選定して調査研究を展開してきたが，静岡市を調査対象地域とした理由は，この地域がほぼ日本全体の平均像を示す地域であり，現代日本人のライフコースを明らかにする恰好の地域であることによっている．このような認識に基づいて第Ⅱ章では，職業経歴，兵役体験とライフコースとの関連が，第Ⅲ章では，家族経歴，同別居経歴，家族意識と世代間関係の諸側面が分析されている．第Ⅳ章では，成人期への移行，戦争，家族連帯，家族経歴等々の指標に基づいて日本とアメリカにおけるライフコースの比較検討がなされ，終章では，既存の調査資料を用いて現代日本人のライフコースが記述・分析されている．

最後に，本書全体を通読して得た評者の印象を述べると，本書は，わが国におけるライフコース研究のあり方を提示した最初の研究文献として高く評価することができる．しかし，各章・各節には，精緻な分析に基づく結論が提示されているにもかかわらず，これらの結論から導き出された現代日本人のライフコース像が明確な形で提示されていないのは残念なことである．ここだけが，読者の一人として欲求不満におちいった点である．

ともあれ，現代日本人のライフコース像の提示と，このいわば平均的・標準的ライフコース像からかけ離れた地域におけるライフコースの研究が，今後，ＦＬＣ研究会によって展開されることを期待したい．

（清水浩昭）